

女子大國文

第百七十七号

令和七年九月発行

女子大國文 第百七十七号

令和七年九月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百七十七号

令和七年九月十五日 印刷
令和七年九月三十日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼 発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇五十一五三一九〇七六

FAX 〇五十一五三一九一二〇

振替 一四二〇一三三三三三

〒605-8501 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇七五十四一四一〇八代

FAX 〇七五十四一六二八二

令和六年度公開講座

藤原俊成・定家の「あしたづ」の歌を読む …… 小山順子（一）

学習院大学所蔵『万葉聞書』について …… 江富範子（二三）

—— 解題と翻刻（上） ——

伝世尊寺定実筆源氏物語切「東屋」の性格 …… 池尾和也（六〇）

『浜松中納言物語』における皇女降嫁辞退について… 朝日眞美子（八五）

—— 『源氏物語』の苦悩を踏まえた展開 ——

『新古今和歌集』寿本の書誌解題及び考察 …… 久保木秀夫（一〇六）

『実隆公記』註釈稿 …… 藤原静香

—— 文亀四年甲子（二五〇四）二月三日～十九日条 —— 柴田清子（四三）

中島和歌子

彙報 …… （一八〇）

京都女子大学国文学会

彙報

○女子大國文第一七七号をお届けします。

○前期に開催されました新入生歓迎行事の感想文、及び卒業論文発表会の要旨・体験記は次号に掲載いたします。

研究室だより

○昨年度一年間、京都大学にて国内研究員をお務めになりました大谷俊太先生がお戻りになりました。

○今年度一年間、中西俊英先生が龍谷大学にて国内研究員をお務めになります。

○今年度の文学部国文学科長および国文学会代表幹事は、坂本信道先生です。池原陽斉先生・野澤真樹先生とともに、国文学科・国文学会の運営に尽力されておられます。

二〇二五年度国文学会行事（前期）

○新入生学科ガイダンス

四月七日（月）午前九時より

於…J二二四教室

○新入生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月一四日（土）一三時より

於…音楽棟演奏ホール

能の歴史・囃子・狂言に関する解説を聴講、謡体験、装束着付実演、狂言「寝音曲」、仕舞「橋弁慶」を鑑賞。

○卒業論文発表会

六月二八日（土）一三時より

於…J四二〇教室

「髪」の歌語史

—平安中期までの詠まれ方の変遷を探る—

鈴木 琴子氏

歌語「あは雪」の変遷

—『万葉集』から新古今時代まで—

土井 萌菜氏

「かはづ」の季節感の変化

—和歌を中心に—

松下 渚沙氏

中原中也「盲目の秋」における「曼珠沙華」の使われ方

山崎 遥氏

山川方夫ショートショート作品に於ける他者と死の関連性

—「暑くない夏」を中心に—

馬瀬 愛央氏

二〇二四年度（令和六年度）論文題目

中 古

卒業論文

上 代

上代の怨霊研究

——大津皇子を怨霊として定義できるか——

『萬葉集』における動詞「明く」の意味用法について

——「明く」は「夜明け」を指すのか——

『萬葉集』伝本の校異

——尼崎本と廣瀬本の本文を中心に——

「髪」の歌語史

——平安中期までの詠まれ方の変遷を探る——

七夕物語の日本的展開

——「人麻呂歌集七夕歌」の独自性——

『萬葉集』一六九番歌の「日」と「月」

——実景か譬喩か——

人麻呂殯宮挽歌異伝考

——推敲説による説明は可能か——

稲生 有華

菊地加南美

坂本彩香里

鈴木 琴子

中村 碧

藤原 悠

矢野まひる

和泉式部が描く敦道親王と為尊親王

——『和泉式部日記』を中心に——

『落窪物語』における道頼の色好みと一夫一妻主義

古代における藤花のイメージ

——藤原氏・紫色との関係を中心に——

平安時代の結婚に求められた男性の地位

——『落窪物語』少将道頼を中心に——

引歌から考察する『とりかへばや物語』の特徴

——藤原兼輔「人の親の」の歌を中心に——

平安期の貴族男性が好んだ女性像

——『落窪物語』を中心に——

平安時代の女性が身につけた教養

『竹取物語』改作者——求婚譚を中心に——

『とりかへばや物語』における作者の女性観

——女主人公の正体発覚場面に注目して——

『和泉式部日記』における月

『更級日記』における猫への転生

——平安貴族の猫に対する考え方より——

浦野 真静

浅野 佳子

井内富美子

石田 彩乃

大久保琳央

川井田紀子

黒河 真帆

古武 楓華

西田 咲桜

松尾満寿美

眞西 愛美

平安期における女性の絵画制作

—『源氏物語』を中心に—

『六百番歌合』恋九・十九番判詞について

『拾玉集』「十題十首和歌」猷歌考

藤原俊成の「面影」

平安時代の散らし書きに関する考察

『百人一首』崇徳院歌の解釈について

歌語「あは雪」の変遷

—『万葉集』から新古今時代まで—

「かはづ」の季節感の変化 —和歌を中心に—

『百人一首』清少納言歌の解釈

中 世

源満仲と九頭伝説

『今昔物語集』巻二十における天狗説話の位置づけ

『阿波の狸合戦』の変転について

—なぜ、民話が広く浸透したのか—

『宇治拾遺物語』第五七話「石橋下蛇事」考

—蛇婿入譚・苧環型との関わり—

『塵塚物語』娯楽性のある説話の意義について

美濃部好香

『宇治拾遺物語』第十七話「修行者百鬼夜行にあふ事」考

立木 亜美

「羅刹女国」における表現と編集意図の比較

古野 栞音

橋口 天音

—『大唐西域記』『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を中心に—

松尾 実桜

猪野美裕紀

〈今昔的〉な女性像の形成と広がり

松村和佳奈

清田奈都美

御伽草子としての「あつたのしむひ」が辿った

南 明日香

酒井 光

変遷過程と編集意図

望月あかり

土井 萌菜

寡婦の発心 —『閑居友』下巻第一話をめぐって—

和栗 令奈

松下 渚沙

—周縁の陰陽師などを中心に—

金田 夕妃

吉田 妃那

狂言と茶の関わり

加藤 愛翔

黒川能の継承と発展 —現地調査に基づいて—

玉田 愛莉

中世文学における猫の不思議

荒井 杏華

—怪異〈猫また〉を中心に—

藤本安絵理

吉村 峰葉

狂言「釣狐」と「狸腹鼓」について

丸山 恵生

梅原 那月

—大曲化の過程と理由—

八尋 桃子

岡田 楓香

国語教育における狂言教材の可能性

—伝統文化の継承と主体的な学びの実現—

能勢菜々子

狂言における中世の現実と虚構

—太郎冠者の描かれ方を中心に—

近 世

芭蕉の一座した歌仙における月・花が共に詠まれた句について

伊東沙也加

『酒吞童子』における恐怖表現について

東田 紗季

浮世草子における義経と弁慶の対峙

大畠愛優香

——義経記・橋弁慶との比較から見えるその特徴——

近松三大姦通物の敵役の役割

沢柳 妃奈

——堀川波鼓を中心に——

江戸時代における女性の化粧

『都風俗化粧伝』『容顔美艶考』を中心に

前田 未羽

烏丸光広の和歌の特殊性

湯口 萌愛

——『黄葉和歌集』に詠まれる植物に焦点を当てて——

『黄葉和歌集』一五一九番歌に見る烏丸光広の趣向について

吉岡 志栞

『曾我物語』を題材とした八文字屋浮世草子における

勘当について

若木 里紗

近 代

樋口一葉「軒もる月」論

秋口 ゆめ

——一時間に満たない時間設定の意味と効果——

樋口一葉「にぎりえ」の挿絵について

東 千紗

——二枚の挿絵への作者の関与を巡って——

田沢稲舟「しろばら」論——表題に着目して——

磯本 実来

田山花袋「少女病」論

岩城 芽依

——魅力的な少女像へのこだわり——

山川方夫ショートショート作品に於ける他者と死の関連性

——「暑くない夏」を中心に——

馬瀬 愛央

川端康成「朝雲」考

浦田 彩水

——思慕感情の落ち着きと手紙の関連性——

「瓶詰地獄」論

大木菜美佳

——三つの手紙の配列、異母妹森綾子との関連——

檀一雄「樹々に匂う魚」「裾野少女」に於ける富士について

大倉 愛美

樋口一葉「闇夜」が受けた同時代評価について

角田 栞莉

谷崎潤一郎「呪はれた戯曲」考

小西花乃子

——オスカー・ワイルド「架空の顔癩」からの影響を中心に——

岡本かの子「花は勁し」論——公开展の描写について—— 重松 沙希

『めさまし草』所載、合評「三人冗語」の意義 西谷 美槻

——森鷗外の批評を中心に——

樋口一葉「たけくらべ」論 樋上三希子

——水仙の造り花の意味について——

島崎藤村「刺繍」を読む 増田 実桜

——「おせん」に着目して——

「にぎりえ」におけるお力の外見描写 村田 望

中原中也「盲目の秋」の聖母像 森本 綺乃

芥川龍之介「秋」論 安松 美咲

——書簡・草稿の検討を中心に——

横光利一「蠅」と「赤衣着物」の類似性 唐橋さくら

太宰治「駈込み訴へ」と「走れメロス」の関連性を探る 鈴木 友葉

——山岸外史の手紙に着目して——

尾崎翠作品における食物と恋愛表現について 住吉 環

『少女地獄』『何んでも無い』の嘘 角川 七海

——姫草ユリ子の嘘は月経が原因なのか——

太宰治「斜陽」のかず子のキャラクター像について 中尾 菜月

太宰治「畜犬談」において語りの現在が描かれる意義

西村美乃里

宮澤賢治短歌における「くるみ」「黄金のあかご」

表現とその発展 原田萌々香

江戸川乱歩「パノラマ島綺譚」における花火の位置づけ

藤岡 心音

太宰治「花燭」における桜の園の由来 古川 寧々

芥川龍之介「奇怪な再会」は探偵小説なのか 宮地 舞子

太宰治「陰火」が表す女性の変化について 山口 華香

中原中也「盲目の秋」における「曼珠沙華」の使われ方 山崎 遥

漢 文 学

頼宗が詠んだ「胡蝶の夢」について 石川 弥空

古代・中世の日本における武照像 長竹 美和

——仏教と呼称を中心に——

古代中世の〈薬湯〉付端午の節供の菖蒲湯の定着 八木小百合

国 語 学

歌詞における色彩表現——Mr.Childrenの楽曲から—— 寺田 唯姫

丹波方言の現状——高校生へのアンケートより—— 赤松 優香

若年層における方言使用状況について 秋山ひなた

——京都女子大学生を対象としたアンケートによる——

流行歌の感情表現 — カラオケランキングからみる — 市川 りの

湖東方言の現状 — 中学生へのアンケートをもとに — 猪塚 萌那

「人の心を掴む」 広告コピー 井上 真歩

— 業界ごとのアンケート調査を元に —

役割語とステレオタイプ — 宮崎駿監督作品より — 入潮 虹都

Bzにおける歌詞の変遷 岩野 瑞季

少年向け雑誌、少女向け雑誌におけるオノマトペの使用傾向と比較

岡田 紅葉

女子大学生の自称詞の変化と選択 金川 綾世

— 京都女子大学生対象のアンケート調査を中心に —

ファッション雑誌における言語表現の性差 川上 慶子

漫画『FAIRYTAIL』における

キャラクターの性格について 川嶋 冴桜

— 「一人称」「呼称」「口癖」からみる —

流行歌における日本語 小館 有紗

— 一九八〇年から二〇二三年まで —

日本における名前の変遷 浄慶 和織

— 名前ランキングから見る特徴 —

滋賀県南東部方言について 立岡 伶菜

— 高校生へのアンケートをもとに —

漫画『サザエさん』における家族間での敬語 戸倉 遥子

— 昭和21年から昭和41年にかけての変遷 —

デイズニー映画の歌詞の変遷 東 智里

— 一九三七年から二〇二〇年まで —

Ayase の歌詞における表現特性 広原 愛梨

『週刊少年ジャンプ』連載作品におけるオノマトペ 前田秀寿美

誤用されやすい言葉の実態 — アンケート調査をもとに — 増田 希美

東京スカパラダイスオーケストラにおける「歌モノ」の分析

松田 すず

映画のキャッチコピー 宮本 陽菜

— 邦画と洋画の一九八〇年代から二〇二〇年代まで —

誤用表現の使用状況と意識調査 山崎 麗

— 京都女子大学国文学科の学生を対象に —

NHK 「みんなのうた」の歌詞の変遷 渡邊 佑南

— 一九六〇年代から二〇二〇年代まで —

方言景観の位置づけ — 空間的機能の検討から — 古鞘 歩花

明治時代の小説における「ゝ的」の使用傾向 笹川明日香

語彙の選択と文法の比較 谷 美鈴

— Jeoff Dyer 『But Beautiful』を —

村上春樹訳『バット・ビューティフル』について —

役割語としてのマンガにおける笑い表記について

丸吉 芽生

「バグる」について

松田 風夏

高知方言における「くゆう」「くちゅう」の使い分け

足立 紗那

キャッチコピーにおける疑問文の特性

森野すみれ

国語教育における多元論的な語彙の学習

石川 小波

「伝統」について

板西 清香

ニセ方言の使用度、使用実態 ― 関西弁を中心に ―

入江 帆香

現役大学生の死語・廃語とその傾向

請井佐智子

変化する「推し」という語について

川野 知香

漫画『ハイキュー!!』におけるオノマトペ

木戸 瑠泉

手書き文字が生み出す伝達による効果

木村 心音

―パラ言語的機能に着目して―

女子大学生の絵文字利用について

下農 琴美

―関係性や親密度・会話内容・媒体と手段・パーソナリティから考える―

京都弁の「ハル」の用法について

谷川 莉子

奄美諸島と宮古諸島に見られる琉球文化

谷本 菜々

「たそがれ」の変遷

津田 晴香

『竹取物語』ではなぜ「三」が多用されているのか

中野 瑞姫

感謝表現「もったいない」について

野田 梨湖

疑念表明の表現と役割語

日置 優

くメディアの女性文末詞と合わせてく

薔薇色の色彩語としての意味の衰退

町川 七菜

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。紙面の都合等により、目安の枚数を大きく超過する原稿に対しては、編集委員会より分量の削減を依頼することがある。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたものの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授)(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはない。

- ③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先

行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。

本投稿規定は令和六年六月五日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

池原陽斉・大谷俊太・小山順子・坂本信道・中島和歌子・中

前正志

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果、五点が掲載となりました。

小山順子先生には、令和六年度公開講座の御講演内容を御寄稿いただきました。あつく御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山中・川島)